平成２９年度は、すばるHSC探査の約30%のデータから得られた広帯域および狭帯域撮像データに基づいてz=4-7における58万個の銀河を検出した。これにより、高精度の角度相関関数を得ることに成功した。標準的な構造形成モデルと比較した結果、銀河の星形成率と質量降着率との比が赤方偏移進化しないこと（普遍的関係）を見つけた。この普遍的関係を用いると、宇宙星形成率密度の進化は、宇宙の構造形成による暗黒物質ハローの増加と質量降着率の減少の２つの物理現象で説明できることを示した。本年度は１２月の時点で２８編の論文を査読誌に出版もしくは投稿した。